

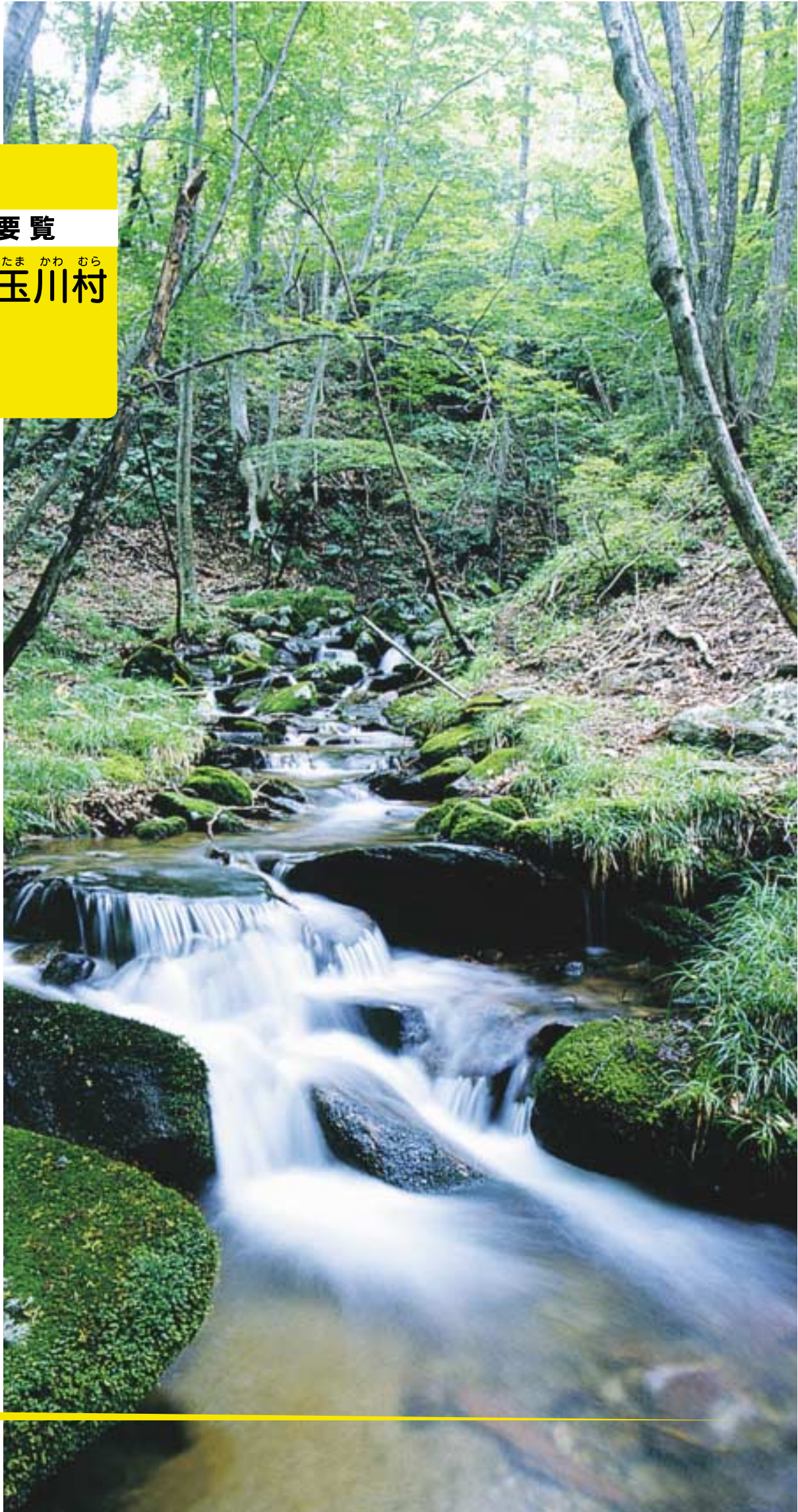
2009年

村勢要覧

ふくしま けん たまかわ むら
福島県玉川村

未来^{あす}へつながる村づくり

”元気な“ たまかわ



「若い人が住みたくなる村づくり」

福島県の阿武隈山系の中南部地域に位置する玉川村は、豊かな自然環境と由緒ある文化財、そして国際定期路線を持つ福島空港を有する福島県の空の玄関口でもあり、都市近郊という立地条件や交通の利便性にも恵まれて、活力のみなぎる“人・物・情報の交流基地”として新たな前進をしてきたところがあります。

今日の社会環境は、少子・高齢化や高度情報化、地球温暖化などの急速な社会情勢の変化と、国や地方を取り巻く財政・経済の厳しい状況にあります。

こうした時代を背景に、村民のみなさまとともに“知恵を出し、汗を流し”創意工夫による行政推進を図り“未来へつながる元気な村づくり”を進め、若い人が玉川村に住んでみたい、住みたいと思う村づくりに努めているところであります。

この要覧は、玉川の今を広く知っていただくために、西暦2009年版として発行いたしました。ぜひ、有効にご活用いただき、多くの方に玉川村についてのご理解を深めていただければ幸いです。



玉川村長 石森 春男



春



岩法寺山に咲くこぶし

そよぐ風が新たな希望と期待
をはこぶ春。人々の心は生気
みなぎり、草木の芽が「張る」
などにも由来する清々しい季
節だ。雲雀がさえずり、こぶ
しの花開き、辺りはやわらか
な薄黄緑色になる。あたたか
く素朴な自然が豊かな人情味
あふれる玉川の人と風土を培
ってきたのだろうか。



春の気配を感じさせる東風が吹き
池や沢の水が、ゆっくりととけはじめ
百花繚乱の世界へと導く。



こども
みらい
風物詩

山里に吹く春風は、

子どもたちにも

新たな季節の訪れを告げる。

新しいものと古いものとの融合ゆうごうのなかで

子どもの世界にも時代の先端を行く、

さまざまな経験がおりこまれる。

木洩れ日こもをうけた暖かな生命いのちの鼓動こどうは

人々を新たな躍動やくどうへといざなう。





S p r i n g

春



川辺小学校の「旗持ち入学」

つくしやタンポポの咲く小道
を晴やかな笑顔の子どもたちが
学校へと急ぐ。新学期をむ
かえて、心も身体も軽やかに
喜びを表現している。子ども
たちの顔が朗らかで純真なのは、
幼い頃から自然の中でゆっく
りと深呼吸しながら育ってき
たから。そして春は遠足や運
動会など、村のあちらこちら
で賑やかな声援がとびかうと
きでもある。二世代・三世代
が一緒に暮らし、祖父母が孫
の成長を喜び、初節句を祝う。
少し前の日本の古き良き家族
像がここに残っている。新し
い世代と古い世代が共に歩み
ながら、お互いを尊重しあい
敬うことの大切さ。新しい村
づくりへの豊かな思索は、そ
んなにげない日常から生ま
れてくる。




夏



夏の深緑と強い日差しに心
惹かれるのは、わたしたち
の祖先が森林の中で生まれ、
その恩恵をうけながら進化
してきたからだ。蓮の花が
まばゆいばかりの陽の光を
受けながら、涼やかな陰を
つくり村をやさしく包む。





限らない清流。
渾々と湧く生命の水。

こども
みらい
風物詩

夏は一年の中で子どもたちが

一番待ち焦がれる季節だ。

灼熱しゅくねつの太陽のした

大好きな水たわむと戯れることができるから。

そして、友達や家族とつくる夏休みの

幸せな記憶の一つひとつが

子どもたちを育むはぐくむ

かけがえのない糧かてとなる。





S u m m e r

夏



麦わら帽子をかぶりプール通いをする子どもたちの夏。クワガタやカブト虫を誇らしげに自慢しあい、スイカをほおぼる。夏休みは、子どもたちにとって成長のときでもある。学校だけでなく、地域の人と一緒にいう夏休みならではの、さまざまな行事。そして、夏の夜に繰り広げられる花火大会や盆踊りなど、人と風土にふれることで、子どもたちは多くの発見と経験をjして、たくましく成長していく。夜のとばりがおきるころ、明日への飛翔を秘めて村は眠りにつく。



秋



山里は実りの秋を迎えて、鮮やかに
燃え立つ。山は粧よそおいをまし、楓紅葉かえでもみじ、
銀杏紅葉いちょうもみじが、錦を織おりなし、美しいふ
るさとの郷愁きょうしゅうを楽しませてくれる。
陽ひを染め、風を染めて通り過ぎる秋。
そして、時を越え、受け継がれてきた人々
のさまざまな伝統。空高く、秋祭りの
太鼓拍子たいこびょうしがどこからか響いている。





燃え立つ深紅、錦織りなす秋の訪れ。

こども
みらい
風物詩

豊かな自然に囲まれて育つ子どもたちは、

五穀豊穡ごこくほうじょうを神に感謝する気持ちを

幼少のころから肌で感じ取り、生活している。

景色は日々刻々と鮮やかな赤や黄に変わり、

田んぼには積み藁わらが並び、もみ殻を焼く煙が立ち昇る。

子どもたちは、野道に落ちている木の葉や

どんぐりを拾い集め、

秋を十分に楽しんでいる。





A u t u m n

秋



泉保育所の秋祭り

夏の日焼けを残したあどけない瞳で芋を掘り、マラソン大会、村民文化祭など多くの催事さいじに参加する子どもたち。その顔は、秋晴れの空のようにすがすがしく、たくましい成長の跡を残している。秋祭りの神輿みこしを担ぎ、伝統舞踊を披露ひろうする姿は、自信に満ち溢れている。村の人々を見ていると寛容で優しく、不平を言わず、言葉少なく生きていた祖父母の姿を思い出す。それは素朴な自然観とふるさとの原風景がここにあるからだ。今年も豊年満作への感謝をこめて、村々の神社がわきたつ。賑やかな祭囃子まやしと人のぬくもりを感じるひととき。



冬



初霜の便りとともに氷雨が

家々の屋根に降りそそぐ初冬。

一年の無病息災に感謝し、

新しい年を迎え、

郷里に戻った家族との

束の間の語らいの時間をすごす。

白い朝もやと冬枯れの景色に

ふるさとのやさしさがみえる。



川の流れも凍りつき
ゆるりとした叙情詩になる。

こども みらい 風物詩

遠い昔から毎年正月の十四日に行われている

『やっちゃんごや』。

地区の子供たちは、新年早々から作り始めた

小屋の中で甘茶を飲みながら

いろんな話をして過ごす。

そして最終日の十四日の晩、

大勢の人が集まり大いにぎわい、

やがて小屋に火がつけられると、

白い息を吐きながら、天まで焦がす

ひとすじの炎をみつめる。

子供たちは祈る。

よい事がたくさんありますように。

みんな仲良く、安堵あんどの日々が送れますように。

村の新たな一年が

ここから始まるうとしている。



正月14日の『やっちゃんごや』の夜



W i n t e r



木枯らしが頬をなでても、子どもたちの躍動はかわらない。頬を赤く染めて、冷たく澄んだ外気を深呼吸しながら、青空にむかって飛び跳ねる。身体の中で波打つ若い生命を楽しんでるかのよう。

家々の軒先に干し柿や凍み大根が並ぶこの季節、夕暮れ時の家族と過ごすひとときは、心が育つ時間帯だ。家族の絆をつよめてくれるし、思いやりの心も育ててくれる。文明を過信かしのんしすぎている現代人が今一度、見つめ直さなければいけない人との繋がりつなや触れふ合いの大切さをこの村の人々は知っている。そして、冷たい冬の風の中でも、やがて来るあたたかな春に新しい芽がふくらもうと準備していることも、みんな知っている。



玉川村歴史の小径探訪



永承六年(1051)、この地を治めた石川氏の始祖、源有光が石清水八幡宮を勧請したものとわれ、石川郡の他にも広く社嶺を有した古社。

静寂さを秘めた深い歴史、
時の陰影へタイムスリップ。

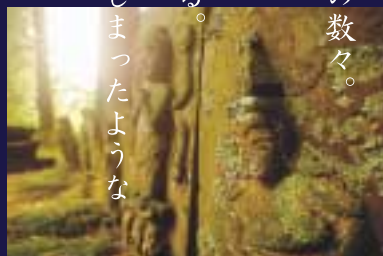
玉川村に残る、由緒ある歴史的遺産の数々。

それらは新しく変貌する村の随所に、

いまなお深い時間と流れを刻み続ける。

そこに居ると時の迷路に迷い込んでしまったような

錯覚を覚えてしまう…。



緑の中に佇む古社「川辺八幡神社本殿」

玉川南工業団地から国道118号を石川方面に向かう途中にひっそりと佇む川辺八幡神社。小高い緑の丘の上に建つ江戸時代初期の建造物で、平成5・7年にわたり、県重要文化財として修復工事が行われた本殿は、永くこの周辺を治め

ていた石川氏の氏神として、広く信仰を集められてきた由緒ある古社です。

現在は、保存のため端垣で囲まれているが、屋根を支える端正で見事な桁の彫刻などは、見るものを圧巻する美しさです。主材に頑強な栗の木を使い、建築様式は太い木割りを用いた豪壮な江戸初期の造りで、寛文・享保などの改造を経て今日に至っていることが現存する六枚の棟札からわかります。「奉棟札正八幡宮武運長久祈慶長四巳亥十月」の棟札写しからみて、慶長年間の建立ではないかと推察されています。また、内陣天井裏に南北朝期の貴重な古文書が隠されていたり、源頼朝の大蛇退治を加護した伝説など歴史浪漫を感じさせる話が残っており、境内はタイムスリップしたような静寂さに包まれています。



優れた石造美術や古墳群

阿武隈川の流域に含まれる丘陵地帯や盆地が交互に連なる地形の中通り地区に位置する玉川村には、地域性を反映した濃厚な石造美術、多くの石仏・板居碑などが広く点在し、それは阿弥陀浄土信仰が庶民の生活に強く根ざっていたことを意味します。

白華山巖峯寺参道にある国指定重要文化財「源基光の石造五輪塔」は密教教理の五大思想である空・風・火・水・地を石で立体的に形作り、方形の地輪（基礎）・円形の水輪（塔身）・三角形の火輪（笠）・半月形の風輪（請花）・団形の空輪（宝珠）より構成されています。基石、塔身、笠屋根のみがその面影を残していますが、その威風堂々とした姿は荘厳で神々しく侵食はしていても、石川一族の栄華をいまに伝えるものがあります。

東福寺は、東国布教僧・徳一上人の開基で日本三薬師として名高い古刹です。同寺の境内には、三十年に一度しか公開されない薬師如来像や鎌倉時代に造られた県重要文化財に指定されている十二神将を安置しています。

また、舍利石塔は、宝珠露盤を置いた屋蓋と塔身、台座で構成され、正面は石扉造りで高さ百八センチメートルの大きさ。周りには弥勒浄土の49院の名が刻まれ、龕内部の中央に孔穴があり、そこに舍利（骨）を納めるようになっていて、大日如来像でふさがれるようになっています。鎌倉時代の弥勒浄土往來の思想を現在に伝える稀少価値のある石造物として、昭和10年に国の史跡に指定されています。

平成9年から本格的に発掘調査が行わ



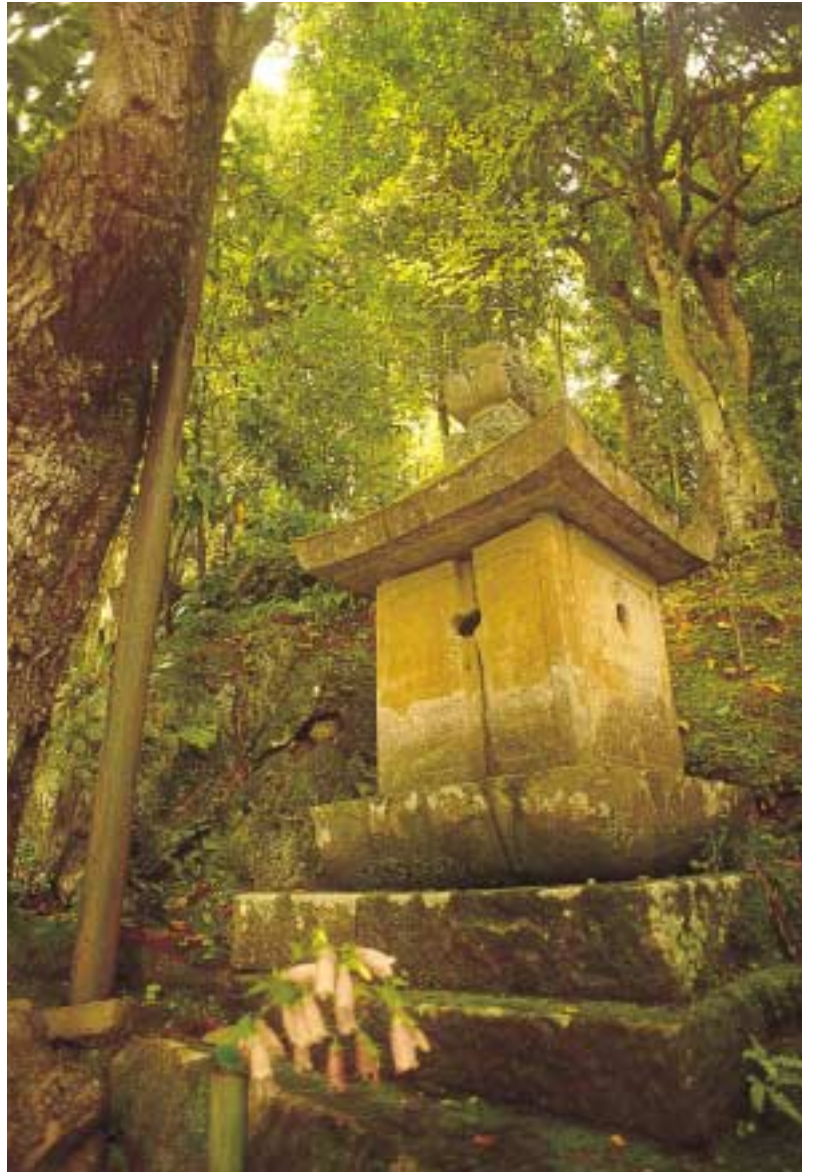
小高字江平地内の沢地から出土した木簡は、聖武天皇が発した仏教令が当地にまで伝わったことを証明する貴重な資料として高い評価を受ける発見となった。

れた江平遺跡は、縄文時代晩期から奈良・平安、中世に至るまでの各種遺跡が発見された複合遺跡で、阿武隈川流域の歴史を解明するうえで注目されています。とくに奈良時代の歴史資料として出土した木簡は天平15年正月の聖武天皇詔に関する資料として全国的に大きな話題を集めました。

この他にも、約5万㎡の広大な敷地からは木製の桶や鋤身、金属製の紡錘などが見つかり、当時の生活を裏づける貴重な発見となりました。



藤原時代末に領主源基光の墓として建立された五輪塔。仏教美術史上貴重な財産として巖峯寺参道の老杉傍らの覆堂に安置されている。



緑の苔むす東福寺境内にある舍利石塔。元久二年乙丑・当地の開山和尚の舍利が安置されていた。弥勒浄土往來の思想を表現している。

南須釜の念仏踊り

南宿集落を中心とした地域に保存継承されてきた念仏踊り。

昭和五十年に県の重要無形民俗文化財に、

昭和五十三年に文化庁の無形民俗文化財に選択となった。

平成十九年には「ふるさとの宝」として『福島遺産百選』にも認定された玉川を

代表する民俗芸能は、春と夏に五〜十二歳の少女達により優雅な舞が披露される。





亡くなった親族の御霊^{みたま}を供養するために踊られる念仏踊り。南須釜の念仏踊りは、まだ、あどけなさの残る少女たちによつて踊られ、見るものを引きつけて離さない不思議な魅力にあふれています。

毎年春の大寺薬師祭の四月三日と夏の八月十四日新盆の家々をめぐり踊られる念仏踊り。その舞台となる南須釜の東福寺境内には「寛延元辰(一七四八)九月吉日念仏供養結衆敬白」という念仏供養塔があり、当初は十五、六歳の男女によつて踊られていたことが知られています。さまざま理由で昭和二十七年に途絶えていた踊りを故大野ケサさんが再興させました。現在の踊りも、そのケサさんが大正四年(一九一五)十二歳の

ときに踊った記憶をもとに再現され伝承されています。

念仏踊りの踊り子は五〜十二歳位までの少女で、約二十名ほどで構成されています。継承に関しては、以前は各地区ごとに世話人がいましたが、南須釜念仏踊り保存会によつて、踊りの指導や管理が行われています。

少女たちの衣装は、もとは元禄の小袖だったのが春は振袖、夏は浴衣で裾からげに膝までたくしあげて、その下に鮮やかな赤い蹴り出しと脚絆をのぞかせます。そして、たすきがけをして手甲、白足袋と草履をはき、花や切り紙で彩られた綺麗な妻折笠をかぶり、手には白扇子と綾竹をもち、踊りにあわせて使い分けま





笛二名・鉦一名・歌方七〜八人が奏でる曲と歌にあわせて、立ち踊りと座踊りが披露されます。伝えられている曲目は九曲で、歌の終わりに「えこつじようぶつ、なむあみたぶつ」とお囃子はやしがはいります。真夏の炎天下、新盆供養の家々を練り歩く静かでおごそかな光景に出会うとき不思議と心打たれるものがあるのは、普段忘れていた日本の原風景を垣間見た気がするからではないでしょうか。

念仏踊りの他にも子どもたちによって伝承されている踊りがあります。

小高地区の大雷神社・秋の祭礼として神社本殿で披露される浦安の舞は、巫女装束みこはなびんざしに花簪はなかんざしをさした少女たちが鈴を手に持ち、世界の平穏を祈念して、おごそかに舞う優雅なもの。夏休みを迎えた子どもたちにより、毎年、真剣に稽古が行われています。

このように玉川には人々の祈りと厚い信仰が育んだ多くの伝統的な踊りが保存されています。万物や神を崇め、先祖の魂を鎮めるさまざまな踊りは、いにしえの人々が残してくれた大切な祈りの文化だと感じるのです。



亡くなった親族の御霊みたまを
供養するために踊られる念仏踊り。

視野を広める人づくり



豊かな発想とグローバルな視点を育成することを目的とし「村づくりは人づくり」の視点から、台湾・鹿谷郷との国際交流や、村内中学2年生の国内研修を行っています。

本村と鹿谷郷とは、昭和63年5月の姉妹都市提携以来「玉川村日華親善友好都市提携推進協議会」を組織し、これまでに多くの村民が派遣大使として鹿谷郷を訪問。平成9年以降、スポーツ交流に主軸を置き、小学生を親善大使として派遣し、平成10年3月には須釜小学校四辻分校の3年生以上13名と教職員や保護者らが、一輪車の普及と指導を兼ねてのホームステイも経験しました。

平成11年9月、鹿谷郷のある南投縣を震源とする台湾中部大地震が発生し、鹿谷郷も甚大な被害を被りましたが、目覚ましい復興を遂げています。今後も、国際社会に相応しい人材を育成するため、鹿谷郷との友好・交流を進めていきます。

さらに中学2年生を対象とした「ふるさと創生国内研修事業」では平成2年度から、夏休みを利用して福島空港からの就航先である「北海道研修」を平成

12年度まで実施後、平成13年度からは同じく就航先の「沖縄研修」が行われ、平成21年からは再度「北海道研修」が実施されます。

初めて飛行機に搭乗し「豊かで広い北の大地」や「沖繩の青い海と琉球文化」の直接体感、青少年時代の貴重な体験の一つであり、旅先での人々との出会いや、学び、思い出をつくらせて帰路に着く頃には、子どもたちの表情が少し大人びていることに気づかれます。未来を担う子どもたちが玉川村から遠く離れた、未知の地域の風土や暮らしを実感し体験することは、「人づくり・村づくり」につながる大きな財産です。



玉川人物伝 ①

ふるさとと伝承便り

みんなで、多くの人がある
“桜の名所たまかわ”を創りたい。

春、桜の咲く季節がやってくる
と吉村さんの季節もやってきます。

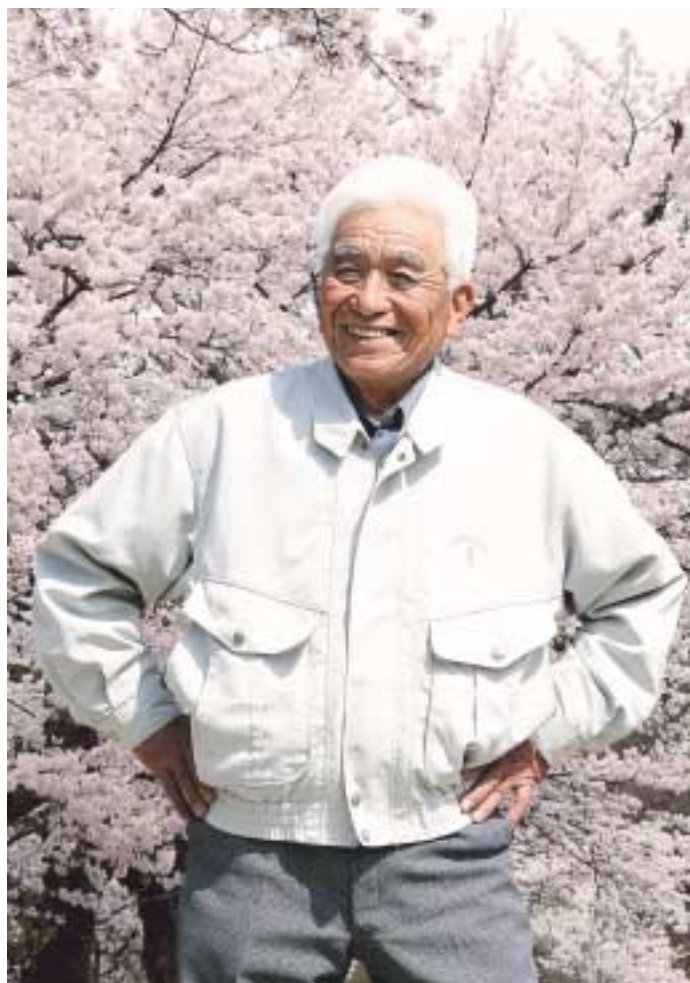
「自分もそうだが他所に旅行するばかり。逆に村内に多くの人が来てほしいと思った」と昭和47年4月の玉川村桜愛好会が発足した
当時は振り返る吉村さんは、発足
当時から今も玉川村桜愛好会の会
長を務めています。

「この地域には意外と桜の巨木
が点在し、山にも数多くの桜が自
生しており、山には自由民権運動
にゆかりの史跡もある。遊歩道や
公園を整備し、桜の名所にしたい」という強い思いが、吉村さんと会
員30人の心を一つにし、山桜の保
存に努め、村内に桜の苗木を植え、
重機で道を整備してきました。作
業や機械の提供などすべて会員の
奉仕です。

こうした地道な活動が認められ
平成7年に財団法人日本さくら
会より表彰を受けました。

「さくら」の会からの300本を権現
山に植え、2.5キロの遊歩道を整備
した。ホッチョコ山と繋がる歩道

をつくり子どもらが遊べる場所
にする。将来は県南一の桜の名所
にしたい。当面は千五沢地内での、
あぶくま高原道路沿い2キロに桜
を植える予定になっている」
そう語る吉村さんの顔は、満開
の桜のように輝いています。



吉村幸雄

玉川村桜愛好会長
玉川村竹炭木炭生産組合長
南須釜老人クラブ会長
〈南須釜在住〉

自分の感情が能面に移入するような
気がし“面打ち”は奥が深い。



奥野四郎

中老人クラブ会長
玉川村山野草会 顧問
〈中 在住〉

「かれこれ28年前、何か趣味を持ちたいと思っていたところ、須賀川市の公民館事業でおばあちゃん達が木彫りのお面を作っているテレビ番組を見て、自分もやってみたいと思ったのが、面打ちを始めるようになったきっかけです」と語る奥野さんの面打ちは、旧国鉄を定年退職してから本格的になりました。

「今まで200個以上、木彫の能面や天狗面、獅子面を打ったが、自

分で満足できた作品はまだまだない。作業中の自分の気持ちや面の表情に表れてくる」と、面打ちは奥が深いようです。松や桧などの角材の状態から彫り始め、彫り方が終って磨きをかけた後、7回ほど色付けを重ね、1個のお面が完成するまで1〜2か月ぐらいかかる根気のいる作業です。

「お面を売ってほしい、と言われるが、欲しい人には贈呈している」その数は90個以上。喜んでもらえることが一番うれしいという。

平成12年11月に行われた玉川第一小学校3年生による、「面打ち体験学習での児童達の感想文を、奥野さんは”心の宝物”として大切に保存しています。

平成15年12月、72歳の時には玉川村公民館で個展が開催され、260人からの参観者がありました。

中老人クラブ会長でもある奥野さんは、玉川村山野草会員でもあり「面は年間7個作るのが精一杯」と言いつつも、体力の限り作り続け、日本古来の伝統文化を伝えたいと、益々意気軒昂です。

銀翼の彼方に続く未来への扉 福島空港

開港以来、着々と進化してきた福島空港。

県内における「人と物」両面の流通を

円滑にしながら地方発展の期待を担う

「銀の翼」たちよ。元気に羽ばたき続けることを願っています。



平成5年3月20日、福島県民の期待を担って、那須や安達太良の山々の連なりを西に遠望する、玉川村と須賀川市にまたがる丘陵地に、2千メートル滑走路の第3種空港として福島空港が開港しました。

その後、国内の空港需要の伸び、産業経済等の広域化・国際化など、地方の空港を取り巻く環境が大きく変化するなか、福島空港は首都圏に隣接し、地理的優位性が備わっていることから、平成7年11月、大型航空機の就航が可能な2千5百メートル滑走路への延長工事に着手。平成12年7月には、平行誘導路を含めた全施設が供用開始され、福島空港初のジャンボ・ジェット機の臨時便が飛来しました。

この間、福島空港は、福島県や北関東圏まで含めた空の玄関口として、県民生活の向上や産業経済の活性化などに大きく貢献し、空港の利用者数も堅調に推移。念願であった福島空港の国際化も、平成11年6月に、中国・上海便と韓国・ソウル便の2つの国際定期路線が開設されました。

平成20年12月末現在での空港利用者数は、延べ918万人となっています。また、福島空港の利用を円滑にするために東北自動車道と磐越自動車道を結ぶ、あぶくま高原自動車道は、全線開通に向けての整備が着々と進められており、空港周辺のアクセス道路も整備が進んでいます。

福島空港は、国際化へのステップを歩み、地域を変革させる起爆剤としての役目も担ってきましたが、最近の世界的な経済情勢等の急変により、一部航空会社の撤退など空港を取り巻く環境は厳しいものとなっていますが、福島空港の美しい銀翼達は、元気に羽ばたいています。



未来への風をうけて。

玉川村は、豊かな自然環境に恵まれた東部地区。店舗・工場や集落が比較的密集する西部地区と、それぞれ特性のある地域を形成しています。

村の西部に位置する玉川南工業団地は、福島空港や高速道路などへのアクセスが容易で、地理的条件に恵まれ輸送用機械関連企業等が操業をしています。

村の基幹産業である農業は、米・野菜（きゅうり、トマト、いんげんなど）を中心に、畜産や果樹（リンゴ、もも）を取り入れた複合経営が行われています。近年は、さるなし、ブルーベリー、りんどう、小菊などの導入を図り、女性や高齢者も栽培しやすい振興作物として産地化をめざしています。

第3セクターの株式会社こぶしの里が運営する玉川村生産物直売所こぶしの里センターでは、これら村内産の新鮮な野菜や果物などの直売や、さるなし、トマト、空芯菜などを加工し商品化した豊富な特産品が販売されており、『道の駅たまかわ』として親しまれています。また、平成21年2月には、村のアンテナショップとして福島空港ターミナルビル内に、『空の駅たまかわ』がオープンしました。

村の産業は、厳しい情勢のなか、未来への風を受け前進しています。



上空から見た玉川南工業団地

産 業



玉川村の特産品



玉川村生産物直売所こぶしの里センター（道の駅たまかわ）



アンテナショップ「空の駅たまかわ」(空港ターミナルビル)



「こぶしの里」店内



県下農業十傑
〈北須釜〉

榊
枝
義
シ
ゲ
子
二
夫妻



県下農業十傑
〈川 辺〉

小
針
金
之
操
夫妻

環 境

未来をはぐくむ住環境。

本村では「未来あすにつながる村づくり」元氣な“たまかわ”をスローガンに、次世代まで豊かな自然を保持し、快適で魅力ある生活環境を整備することに力を注いでいます。

特に毎日の生活に欠かせない「水」に目を向け、生活雑排水を浄化して川にもどすための農業集落排水事業の実施により、3地区に排水処理施設を設置するとともに、合併浄化槽設置事業により水環境の整備を進めています。

年々増え続けるゴミについては、可燃ゴミは石川地方生活環境施設組合で処理し、リサイクル可能なゴミの分別収集など資源の循環に努めています。また、石川地方住民の長年の願いでありました、同組合が運営する火葬場の移転新築が完了。最新設備をもち利便性が高く、自然環境にも配慮された新火葬場の供用が、この4月より開始されました。

村民のボランティアによる道路の『花いっぱい運動』や『ゴミ拾い』、さらに各行政区による『河川クリーンアップ作戦』や『道普請・堀普請』などが行われています。

村民の暮らしや命を守るため、消防団や交通安全協会などが日々、訓練や街頭指導などに力を入れています。

東北自動車道と磐越自動車道に接続される『あぶくま高原自動車道路』は、平成21年度内には村内区間がほぼ完成し、高速交通体系がさらに高まります。



あぶくま高原自動車道路（福島空港IC付近）



花いっぱい運動実施



須釜地区農業集落排水処理施設

健康・福祉

健やかな未来を築くために。

高齢者人口は今後ますます増加し、お互いが共に支えあいながら生活していかなければなりません。村民一人ひとりが健康や福祉に関心を寄せ、自主的に協力しあうことが望まれます。

村では、全村民が健康の維持や増進、病気の予防といった健康教育、治療、機能訓練、在宅ケアなどきめ細かなサービスが生涯をとおして受けられるように、保健、医療、福祉の体制づくりを確立させていく方針です。

高齢者が地域社会のなかで、いつまでも健康で生きがいをもって暮らせるように、在宅福祉サービスの充実や生きがい対策など、総合的な対策を展開しています。

福祉活動で大切なことは、自立を支援することです。障がいを持った人が仕事を通して地域社会に関わり、生きがいと喜びを見出せるよう支援するとともに、母子・父子家庭への経済面・精神面のバックアップも行い、社会的に自立できるように生活資金などの利用促進を図ります。

多様化する生活上の諸問題を迅速に解決するため、保健師、ホームヘルパーや社会福祉協議会・地域包括支援センターなどが連携し、充実した支援体制づくりに取り組んでいます。



玉川村ふれあいセンター



乳児健康相談（村保健センター）



救命講習会



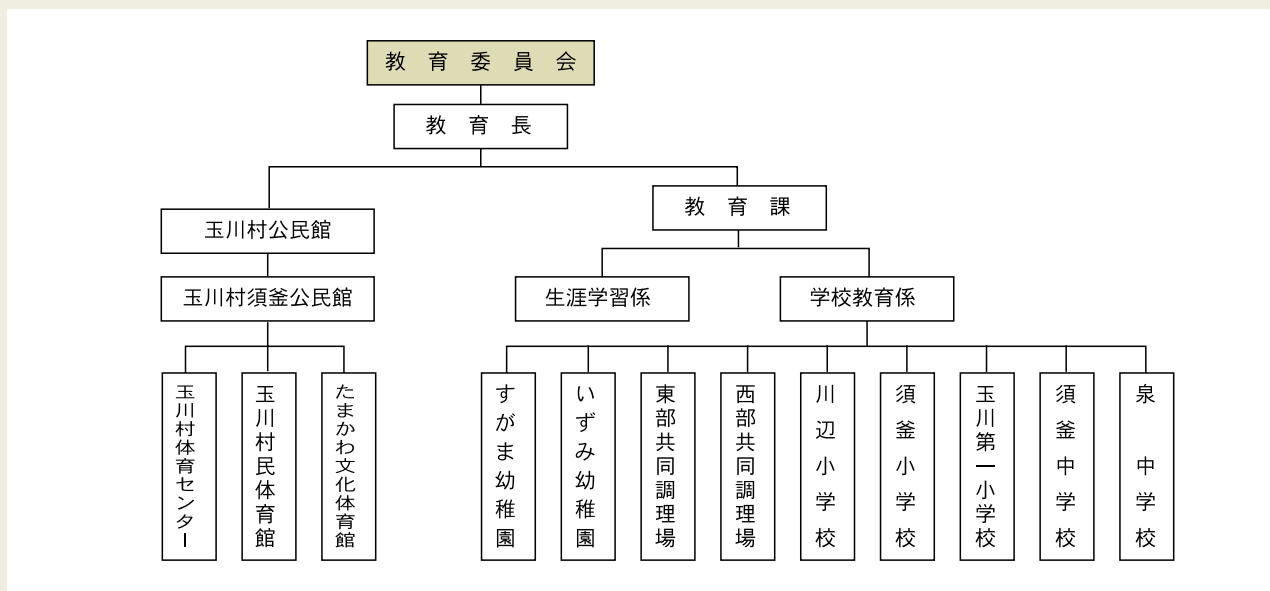
特別養護老人ホームたまかわ荘

教育・文化



さわやか女性セミナー（陶芸教室）

未来を担う豊かな人づくり。



人づくりは、村づくりの根幹をなし、未来を担う子ども達の育成として、特色ある教育の振興に努めています。幼稚園は、いずみ幼稚園が二年保育、すがま幼稚園が三年保育と、複数年保育が実現しました。また、学校教育では、村独自の算数・数学の学校指導員を配置し確かな学力の定着を図っています。

また、最新のコンピュータ導入などの環境整備や新学習指導要領の趣旨や国際社会への対応として、外国人講師による英語学習も進めています。

食に関する指導の充実にも取り組み、特に学校給食では、より一層の地場産品の活用を進めています。さらに、総合運動公園が整備され、村民が気軽にスポーツやレクリエーションを楽しむことができ、スポーツ少年団の活動も活発です。

子どもからお年寄りまでが生きがいを持って暮らせるような趣味や技能、村内の歴史探訪など社会教育や生涯学習までの教育環境の整備に力を注いでいます。

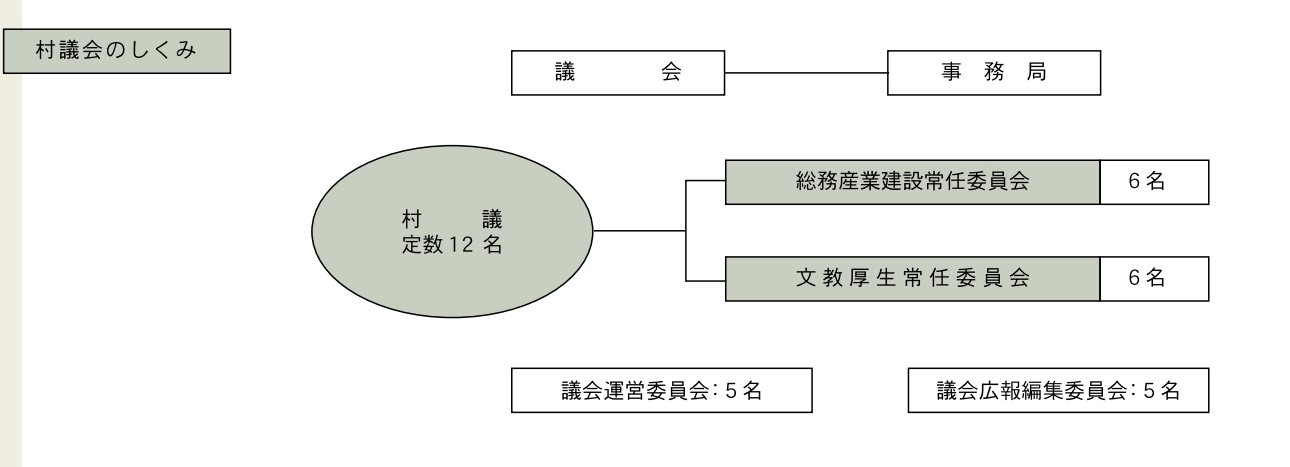
地域に保存されている伝統芸能や文化財などを後世に伝えるべく、支援事業も行っており、村民が潤いと豊かな心を育むことは、未来につながる村づくりに結びつくものと考えています。



須釜小パソコン授業

議 会

心から心への橋渡しをめざして。



議会は、村民の代表として選出された12名の議員によって構成されています。議会は年4回の定例会の他、臨時会を開き、条例の制定、改廃、予算の決定、決算の認定など村政運営上の重要案件の議決や請願・陳情についての審議を行っています。

さらに、専門的・効率的な審議のために、村議会には2つの常任委員会が設けられており、議員はいずれかに所属し、それぞれの分野でより専門的に調査研究をすることともに、議案、請願、陳情の審査などを行っています。

村民と行政を結ぶ心の架け橋が玉川村議会です。



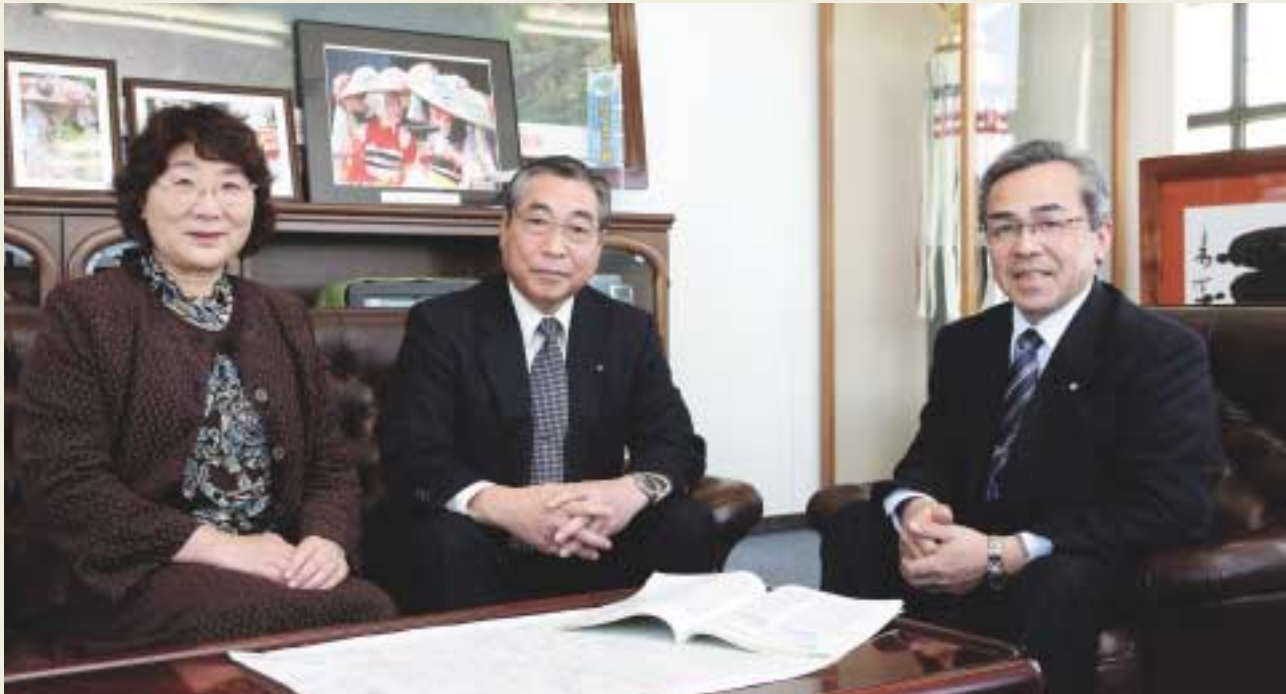
森副議長

須藤議長



行政

時代に対応する行政。

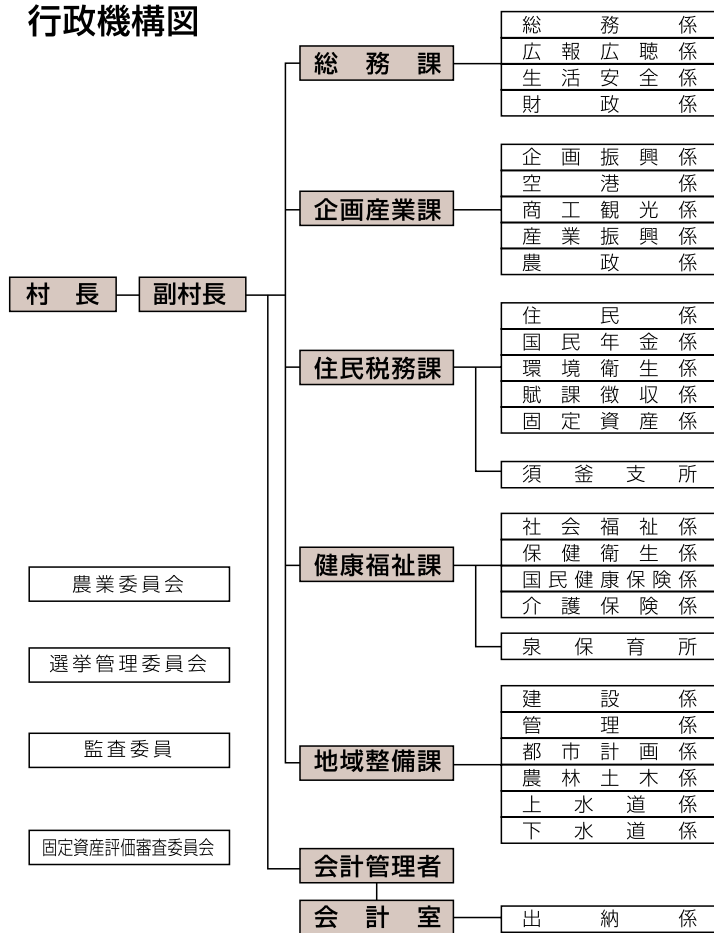


教育長 富岡ケイ子

副村長 草野亀雄

村長 石森春男

行政機構図



新しい時代に対応する行財政運営については、村民一人ひとりの立場に立った行政を心がけます。

村民との対話により、多様化するニーズに対応できる柔軟な組織づくりに努め、スムーズな連絡・調整と情報交換に取り組んでいます。

また、刻々と変化する今日の社会情勢。特に、少子高齢化や教育問題さらに環境問題など高度化・複雑化する住民ニーズに的確かつ迅速に応

えます。

そのため、機構改革や事務改善などによる行政の見直しと、効果的かつ効率的な行政運営のために、経費の徹底した節減に努めながら、健全な財政基盤確立を進めています。

職員についても、さまざまな研修受講等により幅広い視野に立ち、きめ細かな判断力を持つ、新しい時代に対応できる人材の育成に努めています。

未来へつながる村づくり“元気なたまかわ”

誰もがいきいきと生活し、充実感や幸福感を実感できる村づくりをめざします。

第5次玉川村振興計画ダイジェスト

21世紀を迎え、経済低迷による厳しい財政状況、少子高齢化の進行、環境との共生など社会・経済は変革の時期を迎えており、主役である村民の皆さんと行政との連携・協調のもと地域の人材・資源を活用し、村民が主体となり“地域のことは地域で決める”協働の村づくりを進めることが重要と考え、平成18年に、平成27年度を目標として「未来へつながる村づくり“元気なたまかわ”」を村の将来像とする第5次玉川村振興計画を策定。
5つの基本目標の実現に向けて、取り組んでいきます。

将来像 未来へつながる村づくり“元気な”たまかわ

基本理念 住民との協働による自律の村づくり

5つの基本目標

<p>環境にやさしく快適で安心して暮らせる村づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 自然と共生する環境にやさしい村の実現 ● 美しく住みよい村づくり ● 快適性や利便性の向上 ● 安心して暮らせる村づくり 	<p>共に支えあいいきいきと暮らせる村づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 個人を尊重し共に支えあう福祉社会の実現 ● 社会保障制度的確な運営 ● 健康でいきいきと暮らせる生活を支援する保健・医療の充実 	<p>豊かな人間性郷土を愛する心を育む村づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 心身の健やかな成長を支援する学習環境の整備 ● 誰もが学べる生涯学習・生涯スポーツの推進 ● 地域活動や地域文化の振興 	<p>魅力的で活力に満ちた村づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 産業の振興（農林業・商業・工業の振興と雇用対策や消費生活対策の推進） ● 村の魅力づくり（地域の賑わいや新しい地域文化・ビジネスの創出と地域の特性を活かした観光の振興） 	<p>時代の変化に的確に対応できる村づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 住民と行政との協働による村づくり（住民のアイデアや意見を活用できる仕組みの構築） ● 時代の変化に対応した行財政改革の推進
--	---	--	--	---



玉川村役場庁舎

「玉川の由来」

旧須釜村から旧泉村に流れている玉川（その後、名称変更されて泉郷川）にちなんで命名されたもので、その意味には、相馬にある妙見神社がその昔、泉の庄玉川の辺に鎮座していたという古事があり、さらに、泉が須釜村と合併して川になると云う意味が含まれている、と合併当時の記録に示されている。

※妙見神社・両村境の玉川沿いの小高い森に鎮座する社。



東野の清流【うつくしまの音30景】

玉川村の地勢

玉川村は福島県の南部、石川郡の北西部に位置し、東西に11.3 km、南北に9.2 km、面積が46.56 km²です。本村東部は阿武隈山系の西斜面で、相対的に起伏の多い山間地帯であり、西部は阿武隈川沿いに展開する、比較的平坦な地形です。気象の特徴としては、阿武隈山系特有の起伏の多い地形のため、標高による気象条件の変化が大きく、気温の年較差や日較差も比較的大きいなど気象的制約が多い地域です。



玉川村民憲章 昭和60年11月制定

玉川村の住民としての誇りと責任を持ち、美しい自然と伝統ある郷土を愛し、さらに活力に満ちた魅力ある村づくりを進めるため、この憲章を制定し実施します。

1. 美しい自然と伝統を大切に、住みよい村をつくりましょう。
1. 教養と文化を高め、心豊かな村をつくりましょう。
1. 健康で楽しく働き、活力ある村をつくりましょう。
1. 思いやりと連帯の心を養い、明るい村をつくりましょう。
1. 広い視野と創意を持ち、飛躍する村をつくりましょう。



岩法寺地内のカタクリの花



乙字ヶ滝【日本の滝100選】



〈村のシンボル〉



村の花: 山 桜



村の木: 赤 松



村の鳥: 山 鳩

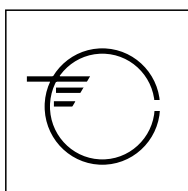


たまかわ文化体育館

玉川村役場
 〒 963-6392
 福島県石川郡玉川村大字小高字中畷 9
 TEL 0247 (57) 3101(代)
 FAX 0247 (57) 3952
<http://www.vill.tamakawa.fukushima.jp>



たまかわ文化体育館の緞帳



玉川村章 (昭和49年制定)

玉川村の頭文字「た」を図案化したもので、村民の和と協力によって明るく豊かな村づくりに着実に進む玉川村を象徴している。

